



受け継がれる 日まで

神田松之丞

「どうやったら、そんなに長いお話を覚えられるのですか？」

お客様からや取材などで、たまに聞かれます。

講談は、短いお話でも二十分ほど、長いお話だと一時間近いものもあります。さらに、連続物と呼ばれる、約三十分〜五十分×全二十話以上に及ぶものも。

昔は、釈台という小さな机の上に本を置いて読んでいたんだそうです。その名残で、講談のお話（ネタ）のことを、「読み物」といいます。しかし、いつの頃から、暗記して語ったところ、それがウケたらしく、それ以降はみんな暗記するようになったとか。余計なことをしてくれたものだと思います（笑）。

もちろん、暗記するのはとても大変です。視覚情報を写真のように覚えられる映像記憶という能力があるそうですが、その聴覚版があればいいのになあ、と

いつも思います。

読み物のお稽古は、まず教えていただく先生から台本をお借りします（大切な台本ですので、コピーをとって、すぐにお返しします）。次に、そのコピーをA5サイズのノートに書き写します。それを先生の前で読んでみて、色々な指摘を頂戴します。

講談は、脚色はされていますが、史実に基づいたお話が多いので、たくさん固有名詞が出てきますし、現代では使われない言い回しや、当時の風習などもあります。そういった分からないことを教えていただくのも、大切なお稽古です。

台本ノートには、先生からご指摘いただいたことや、自分で気づいた工夫などを書き込んでゆき、いよいよ物語を身体に入れてゆきます。

わたしの場合は、まず台本ノートを片手にもち、声を出して読みながら歩いたり走ったりします。何度も何度も繰り返し、少しずつ台本ノートから目を離して、暗記してゆきます。

読み物によっては、本場に一言一句台本通り覚えるものと、物語の流れを把握し、本場に大事な固有名詞や間違えてはいけないところだけをしっかりと覚えて、あとはあえて曖昧に記憶するものと、記憶法を使いわけています。

さあ、いよいよ「ネタおろし」といって、お客様の前で最初に読んでみる日。



かんだ・まつのじょう●講師。東京都生まれ。2007年三代目神田松鯉に入門。12年二ツ目昇進。15年「読売杯争奪 激突! ニツ目バトル」優勝。18年「第35回浅草芸能大賞」新人賞受賞。19年「平成30年度花形演芸大賞」金賞受賞。20年2月真打昇進と同時に六代神田伯山襲名予定。持ちネタの数は130を超える。

大きな姿見を前に、ストップウォッチで時間を測りながら、本意気（本番と同じようなテンションで演じてみる）で通します。時間が許す限り、何度も何度も。

自分のなかで、「このくらい話が身体に入っていれば大丈夫」という感覚があります。つまり、お客様の前で演じて、プロとして最低限恥ずかしくないレベルで出来るな、という手応えです。

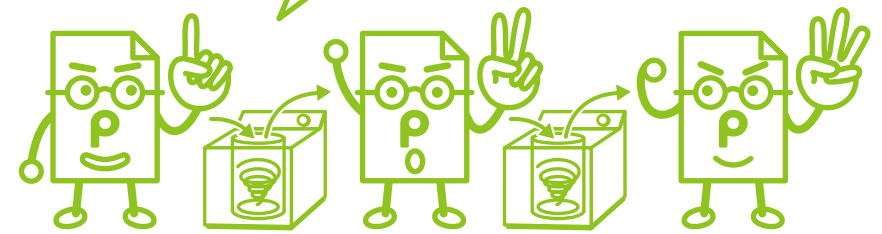
舞台というのは「ナマモノ」なので、万全の稽古をもって臨んでも、まったくウケなかったり、ちょっと不安だな、大丈夫かな、と心配しながらやってみたら、お客様に乘せられて、実力以上に上手かった！と感ぜられたり。最高の稽古場は、実戦です。

伝統の継承とは、まったくそのままにも変えずに受け継いでゆくことではなく、先人たちの創意工夫に敬意を払いながら、さらによいものにして次世代へ繋ぐために七転八倒することだと思っています。

いつかわたしの手書きの台本ノートが、誰かに受け継がれる日まで、できるだけたくさん増やしておきたいですね。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

紙の人生は、3回以上ある。
紙は「パルプ」と呼ばれる木材などの植物繊維の集合体。だから、ときほぐして、インクなどの余分なものを取り除けば、また紙になれるんです。ちょうど洋服を洗うみたいに、紙専用の洗濯機でかき混ぜると、トロトロの繊維の状態に。何度もくりかえすと繊維は劣化していくけれど、一般的には3〜5回もリサイクルできるんだって。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、<http://kamitsubu.com/>「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

今回は10月3日号、堀越正己さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

Photo: Wataru Sato